

て消失した。

奥羽山脈東斜面（宮城県側）に生息するニホンザルの分布と分布の限定要因に関する研究

遠藤純二（石巻市立東浜小学校）

ニホンザルは日本列島のほぼ全域に分布している。しかし、東北地方にかぎってみると、青森県下北半島、津軽半島、白神山地に三つの生息域があるほかは、それより南、秋田県、岩手県、山形県、宮城県にかけて、分布の大きな空白域となっている。この地方のサルが今日までにたどった歴史を明らかにし、分布の限定要因を探っていくためにも、現在のサルの生息状況を把握しておく必要がある。そこで、宮城県下の全市町村に対してアンケートを依頼するとともに、聞き込み、実地踏査によって、サルの分布と、推定生息頭数を明らかにした。

宮城県のニホンザルの分布を歴史的にみると、奥羽山系と北上高地（金華山島を含む）の二大生息域があったことがわかる。現在、北上高地には金華山島に5群186頭が生息しているのみである。一方、奥羽山系では11群410頭が生息していると推定される。また、群れ以外にハナレザルやオスグループも確認されている。金華山島ではそのようなオスは約25頭、そして奥羽山系、その他の地域では約15頭が群れ以外にいることが推定された。したがって、現在までにわかった宮城県下のニホンザルは16頭636頭と推定される。

また、これら現在のサルの分布と、過去に調べられた宮城県のサルの分布（長谷部、岸田、竹下、環境庁）を比較してみると、次の点が指摘できる。

①サルが生息している市町村が時代とともに減少していること。②絶滅していった地域を年代順にあげるとまず明治から大正にかけて北上高地内陸部が、ついで大正末から昭和初めにかけて三陸海岸域と南部県境、さらに昭和30年以降に奥羽山脈の県北部となる。現在は奥羽山脈の県中部、南部にしか生息していない。

分布の限定要因を探るため、これらの結果を基に、より詳細な分布の歴史的变化を調査中である。

高崎山生息ニホンザルの自然林内における採食量調査

横田直人・荻本庸夫（大分短大・園芸）

ニホンザル社会と植物界との食物需給の関係を通して、高崎山のあり方を考察する目的で行っているが、ニホンザルの山の中での採食量については、いまだに調べられていない。そこでA群・オトナ雌を対象に、森の中での全活動時間の行動を観察記録することにより、食物摂取量を調査した。

ランダムに個体を追跡し、1分ごとのスキミングによりその行動を観察記録したが、採食行動においては、連続した時間で行い、食物摂取量（種類・部位・回数）を記録した。調査は、1986年3月～1987年2月の間に、各季節5日単位で行った。また5月～11月の期間には、サル寄せ場での人工餌摂取量調査も試みた。A群については、同様の研究を前年度より実施しているが、本年は、6才以上のオトナ雌に個体を限定して行った。

自然林内における採食行動の時間的割合は、年平均24.5%（前年23.9%）であり、季節によって多少の差を認めた。採食していた食物種数については、前年と同様の確認を得たが、前年秋期に、クマノミズキの果実採食が最も多かったのに対して、本年度は、アラカシの果実採食が最上位であった。自然林内における採食には、生産期、生産量などの様々な要因が作用するため、長年月の調査を要するものと考えられる。食物摂取量をもとに、自然林内でのオトナ雌の日平均摂取栄養量を推算した結果、296.3 kcal 摂取していることがわかった。季節により、摂取栄養量に多少の差が認められた。なかでも秋期は、採食時間の割合が他季に比してやや低い値であったのに対して、食物摂取量においては高い値を示した。また、オトナ雌4個体を対象に、寄せ場滞在時間中の人工餌摂取量についても調べた結果、1頭当たり平均494.4 kcal 摂取していることがわかった。自然餌と人工餌の摂取量調査は、今後も継続していきたい。なお前年より進めている植物分布調査は、とくに冬期～春期にかけて重要なムク・エノキについて行っている。